

傷ついてなんかいない

——『ルビーフルーツ・ジャングル』の
レズビアン・ヒロインと1960年代アメリカ社会——

**I Don't Give a Damn What People Say: The Lesbian Heroine of
Ruby-fruit Jungle and American Society in the Nineteen Sixties**

大理奈穂子

This article counteracts the negative evaluation of Rita Mae Brown's novel *Ruby-fruit Jungle* as a failed lesbian feminist narrative. The vulnerability of the audacious heroine Molly Bolt is apparent when considering American culture in the nineteen sixties. Children brought up in the prosperous fifties unashamedly enjoyed a prolonged youth in the libertine sixties. At the time, hatred for motherhood, tied to the limitation of their mothers to the domestic sphere, was common among feminists as well as lesbians. Since, unlike heterosexual women, lesbians did not initially have the benefit of a sexual revolution, it is natural that a young lesbian like Molly would feel antipathy toward heterosexual women of her age. This might also explain her sympathy toward unmanly and gay men, whose marginalized masculine status may be more acceptable to Molly. The comical tone and audaciousness of the heroine of *Ruby-fruit Jungle* shows that widespread hedonism among the counterculture generation was in reality a psychological defense against the pressures of social life.

本稿の目的は、リタ・メイ・ブラウンの問題作『ルビーフルーツ・ジャングル』を、あるレズビアン・フェミニスト誕生の前日談として再評価することである。この小説が活写する1960年代のアメリカの文化的背景を考慮すれば、勇猛果敢なヒロインとして知られるモリー・ボルトの傷つきやすさが明らかになる。'50年代の好景気の下で成長した対抗文化世代は、'60年代の性革命の下で長い青年期を謳歌した。産業の大規模化と消費文化の発達、この世代の父親の権威を失墜させ、家庭に囚われた母親に擬似的な権勢を振るわせた。母性への嫌悪は、当時のレズビアンとフェミニストに共有されていた心情である。また、同性愛者は性革命の恩恵には必ずしも与えられなかったため、モリーのようなレズビアンが同世代の異性愛の女を苦々しく思い、男らしくない男の方に共感を抱いたことは不合理ではない。『ルビーフルーツ・ジャングル』の喜劇的な筆致と勇ましいヒロイン像は、'60年代の若者文化を席卷した快楽主義が、その実傷つくことへの恐れに発する巧妙な防衛機制だったことをよく表している。

Key words : *Ruby-fruit Jungle* **American Society in the Nineteen Sixties** **Consumer Culture**
キーワード : 『ルビーフルーツ・ジャングル』 **1960年代アメリカ社会** **消費文化**

序論

『ルビーフルーツ・ジャングル』(1973年)は、レズビアン・フェミニズムの旗手として知られるリタ・メイ・ブラウン¹の、作家としてのデビュー作にして代表作であり、フェミニスト出版社が手がけた最初のベストセラーとして²、商業的にも大成功を収めた自伝的小説である。レズビアン小説の「悪名」高い権威である、英国の作家ラドクリフ・ホール(Radclyffe Hall)の『さびしさの泉』(*The Well of Loneliness*[1928年])が登場して以来、レズビアンの実現と表象のなかに半世紀近くも引き継がれてきた功罪相半ばするステレオタイプ、すなわちブッチとフェムとの性別役割分担モデルを打ち破った画期的なレズビアニズム賛歌として、この作品はレズビアン文学史にその名を残す金字塔となっている。

本作を評価するために、『ハuckleベリー・フィンの冒険』(*The Adventures of Huckleberry Finn*[1885年])を引き合いに出す批評家は少なくないが、それはこのマーク・トゥェイン(Mark Twain)の名作を、「教養小説」としてよりは、アメリカにおける「ピカレスク(悪漢)小説」の典型として見た場合に、よりの確な指摘だろう³。実際、型破りなレズビアン・ヒーロー、モリー・ボルトの冒険譚である『ルビーフルーツ・ジャングル』は、ピカレスク小説の系譜をこそ受け継ぐ作品だと言える。また本作に先んじて、'50～'60年代の英米両国の文学界に、「ネオ・ピカレスク小説」と呼ばれるピカレスク小説のリヴァイヴァルが起こっていたことも思い出しておきたい⁴。ブラウンの創意は、この伝統的な文学ジャンルの主人公を女性に変えた点でも発揮されていたわけだが、この主人公の性別の変更は、あるいは、レズビアン小説とい

うサブジャンルにおける傑作が、出版市場におけるメジャー・ヒットを勝ち得た要因の一つでもあるのかもしれない⁵。というのも、女性を主人公とするピカレスク小説と言えば、『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe [1719年])で有名な18世紀英国の作家、ダニエル・デフォー(Daniel Defoe)の『モル・フランダース』(Moll Flanders [1722年])まで直ちに遡らなければならないほど、それは開拓の余地の大きな文学ジャンルだったからである。

『ルビーフルーツ・ジャングル』は、レズビアン文学史上このように記念碑的な作品なのだが、それにもかかわらずレズビアン・フェミニズムの観点からは、いくつかの重大な欠点を含む問題作であるとも言われており、そのためか従来は専門的な批評の対象としてはあまり取り上げられてこなかった⁶。マリリン・ウェブによる最初期の書評に従って、本作の問題点を二つにまとめれば、第一には本作が、女に対して極めて敵対的な姿勢に貫かれている点であり、その結果として第二には、レズビアンであるモリーが心を許す相手が、決まって男ばかりだという点になる(Webb 37-38)。なるほど、モリーの行く手を阻むのは、養母キャリーを筆頭につねに異性愛の女であるし、自分の恋人になる女に対してさえ、モリーはセックス・パートナーとしての肉体的魅力以上の価値を求めてはいないらしい。そして確かに、彼女が心からの愛情や信頼を育むのは、むしろ養父カールや従弟のリロイ、ゲイのカルヴィンといった男たちとの関係においてなのである。

レズリー・フィッシュバインはこれらの問題点を敷衍して、一方ではレズビアニズムが性行動に還元されてしまっている点⁷、他方では性差別の政治的解決がまったく志向されていない点において、本作をレズビアン・フェミニズムとは合致しない作品であると結論している(Fishbein 157-59)。本稿が試みるのは、この小説が活写しているとされている、'60年代のアメリカの社会文化的背景を検討することで、指摘はされるもののいまだ答えの出されていないこれらの疑問点に対して、レズビアンとしてのモリーの自己形成過程を重視する観点から答えを見出すことである。というのも、フィッシュバインの批判が依拠する「ナルシシズム」という言葉は、まさにこの時代の若者の自己中心的な心的傾向を表す批判的言辭として、クリストファー・ラッシュの『ナルシシズムの文化』(1979年)によって、人口に膾炙したキーワードだったからである。

それがアメリカ現代史上最も劇的な時代だったがゆえに、'60年代をどう捉えるかをめぐる議論は今日まで

絶えたためしがなく、その厚みはすでに一つの成長産業の様相を呈していると言われるが(Echols 9)、'90年代半ば以降の論考には、この時代を時間的により広い視野で振り返ろうとするものが増えているようである。「カウンター・カルチャー(対抗文化)」という呼称の生みの親であるシオドア・ローザックは、『対抗文化の形成』(1968年)の'95年新装版に新たに加えられた序文の冒頭で、'42年から'72年までという相当に長い期間を射程に入れることで、'60年代の若者文化をより鮮明に意味づけようとしている。かつて『エデンの門』(Gates of Eden: American Cultures in the Sixties [1977年])で、この時代に起こったハイ・カルチャーとポピュラー・カルチャーの境界線の事実上の消失を寿いだモリス・ディクスタインもまた、対抗文化の淵源を'45年から'60年までの期間に求めることで、大変動の'60年代と保守化の'50年代との断絶を埋める道を探っている(Dickstein 13)。もちろん彼らとは違って、「'60年代像を描き直す」(Echols 9)ことは本稿の目的を超えるが、この時代に青春を過ごしたレズビアン・フェミニストによって書かれたベストセラー小説が、なぜこれほどまでに非フェミニスト的に読めちゃうのか、という問いへの答えを見出すためには、'60年代とはどのような時代だったのかを考慮することが必要だと思われる。

〈父の娘〉と母性嫌悪

'60年代に中産階級の若者の間に生まれた対抗文化は、むしろ中産階級の価値観が、第二次世界大戦後を通してゆっくりと遂げつつあった大変容の一部として捉えられる場合に、その歴史的意義を明らかに現すのだと言われている(Dickstein 13)。つまり、著しい好況下における産業化の進展と、広告業の発達による消費文化の隆盛が、儉約、節制、勤勉、自己犠牲、家族中心主義といった伝統的な規範を衰退させ、それらを自己実現、自己表現、個人主義、享楽主義といった新しい価値観へと次第に置き換えていったのである。学生運動に没頭する意志堅固な新左翼と、自由奔放に忘我の境地に遊ぶヒッピーとの間に、物質的な豊かさへの抵抗という共通の基盤を看取したローザックは、それにもかかわらずこの抵抗の形態が内包する、商業主義による再回収に対する無防備さと、貧困層からの共感の得られにくさという弱点をも見据えていた(Roszak 56-72)。『ルビーフルーツ・ジャングル』の終盤に、従弟リロイの妻から羨望の眼差しで「本物のヒッピー」と呼ばれたモリーが、次のように応じる場面がある。「私は前からこうだったけど、これが流行っ

てきただけよ。最近じゃ何でも貧乏が流行を決めるでしょ」(Ruby-fruit Jungle 231)。この冷やかさに表れたモリーの鋭敏な階級意識こそは、労働者階級の出身である彼女と、対抗文化の担い手たちとの間の距離感を示すものだろう。

しかしながらこの会話は、階層の上昇への労働者階級の切望さえもが、すでに商業主義への盲従を通してしか満たされえない、大量消費社会の在りようを露にしている、この時代の経済階層が、文化的にはほとんど隔たりを失おうとしていたことを物語っている。ラッシュによれば、'60～'70年代を席卷し、のちに「ミーイズム」とも呼ばれた自己への関心の集中は、必ずしも中産階級に固有の心的傾向ではなく、むしろ明日の生存を賭けた絶望的な苦闘に日常を費やす貧困層に由来する心性なのだという(Lasch 62-64, 129-130)。貧困家庭に育ち、成功を夢見るモリーも、大学への進学に際しては、映画撮影学科という実務に直接には結びつきにくい専攻を選ぶ⁸。社会よりも芸術に関心を寄せる傾向が見られるという点で、彼女もやはり、一世を風靡した『スポック博士の育児書』(The Common Sense Book of Baby and Child Care [1946年])で育てられ⁹、教育を受けることで得られる利益として、よりよい職業生活に向けての準備以上に「自己表現」の自由を重視していた、この対抗文化世代を(Roszak x x iv)十分に代表しているのだと言える。'60年代初頭の労働者階級出身の高校生は、目指す階層へのより確実な近道だからという理由では、法学部に進んだりしなかったのである。

大学教育がまさにこの時代に飛躍的に普及したことは、ベビー・ブーマーでもあるこの世代の若者の青年期を急速に引き伸ばすことで、若年層に'60年代の社会を揺さぶる影響力を持たせたが¹⁰、彼らの成長と反比例するように力をなくしていったのが、彼らの親たちの世代である。とりわけ父親の権威は、戦後早くから失墜し始めていたことが知られているが¹¹、これにはウィリアム・H・ホワイト(William H. Whyte)が警鐘を鳴らした、急発展する産業の官僚制度化にともなう、男性勤労者の『会社人間』(The Organization Man [1956年])化が深く起因しているとされている(Lasch 40)。労働が細分化された企業組織で働くためには、勤労者は、自営業主体の時代には主流だった自律的な職業人としての働き方を諦め、組織の労働管理に対する受動的な服従の姿勢を身に着けなければならない。このような労働者の「去勢」は、C・ライト・ミルズ(C. Wright Mills)の『ホワイト・カラー』(The White Collar [1953年])のなかでこそホワイト・カラーに結びつけられているが、ここでも階層間格差は

まもなく質ではなく程度の問題にすぎなくなる(Lasch 130)。こうして'50～'60年代の父親や夫たちは、「一家の稼ぎ手」であることで辛うじて、傷つけられた「男の誇り」を慰撫するしかなくなっていったのである(Echols 16, Evans 12-13)。

まだ17歳だったモリーを残して、'61年にあっけなくこの世を去る彼女の養父カールは、まさに当時の「冴えない父親」の悲しい典型なのだが、このことは彼の妻であるモリーの養母、嫉妬深くて狭量なキャリアもまた、ドメスティック・イデオロギーが猛威を振るったこの時代の母親の姿の陰画だったことを暗示している。産業構造の転換にともなう職住分離の結果である家庭における父親の不在は、大衆文化を通して俗に「マミズム」と呼ばれる強権的な母親像を流布させた。だが、子どもを持つ既婚女性が実際にそのような勢力を振るいえたとしても、彼女の権威は夫への経済的依存を基盤にして成り立っていたのだから、このような表象は、現実を一面的に捉えて揶揄するカリカチュアでしかなかったと見なければならぬだろう。父親の存在の希薄化が、家族関係にある種の力学的変化をもたらしたことは確かだとしても、家庭のなかであたかも父親に成り代わったかのように力を得たのは、少なくとも子どもの感情生活においては、母親ではなく子ども自身だったはずだとラッシュは述べている。当時の母親がそれを体現することを強く要請された「母親らしさの理想」とは、しかし彼女たちの多くが繰り返し努めてなお容易に到達しがたい目標だった。自分が申し分なく母親らしいかどうかばかりをつねに気にかけていれば、彼女たちが子どもに干渉しすぎる母親になるのはむりもないことである。孤独な育児に奮闘するなかで母親が苛まれるそのような不安は、過干渉を通じて子どもの心に彼女への疎ましさを植えつける反面で、矛盾するようではあるが、自分が彼女を独占できるようにするために、自分のライバルである父を母が飲み込み、排除してしまったのだという幻想を生み出すことで、子どもの自己愛を肥大化させるのだとラッシュは論じるのである(Lasch 300)。確かに、モリーが愛したのは母ではなく父だったことは明らかだが、彼女がこの父の早逝に象徴される生命力の欠如の理由を、主に彼の不幸な結婚生活に求め、そのことでもっぱら母一人を非難している点からは、逆に彼女の父にではなく母に向けられる甘えや執着心がうかがえるようにも思われる。このように考えてみると、『ルビーフルーツ・ジャングル』の終幕を飾る、母と娘の「感動的」(Webb 37-38)だが「唐突な」(Fishbein 158)和解の場面はむしろ、自分と母とのつながりを認めても、自分と彼女との相違を否定する

ことにはならないのだと知るまでに成長したモリーが、母に過大な期待を抱く自分の自己中心性を省み、母からの最終的な自立を果たすために必要とした、決別の儀式だったのかもしれない。また実際、母性に対する嫌悪は、のちに第二波フェミニズムと呼ばれる女性解放運動の、'60年代後半から'70年代始めにかけての最大の特徴でもあった。『女から生まれる』(Of Woman Born [1976年])によって、アドリエヌ・リッチが経験としての母性を肯定的に再評価するまでは、母性は女に対する抑圧の原因として、レズビアンのみならず異性愛のフェミニストにとっても敵視の対象であった¹²。

社交という名のサヴァイヴァル

性と生殖の分離自体は、早くも戦前の'20年代には起こっていた現象であることが知られているが、「膣オーガズムの神話」(“The Myth of the Vaginal Orgasm” [1969年])の発見に代表される女の性的な自立と¹³、「性解放」になお残されていた婚姻指向の価値観に対する挑戦によって、'60年代の「性革命」はこの先行する転換期とは区別されてきた(Lasch 326-30, D'Emilio & Freedman 239-42)。もっとも、母性からの解放がこの時代に女性解放運動の具体的な達成課題として焦点化されえた背景に、マーガレット・サンガー(Margaret Sanger)らの産児制限活動家が'20～'30年代に展開した、効果的な避妊法の開発と普及をめぐる努力の蓄積が大きく貢献していたことは間違いない¹⁴。だが皮肉なことに、女を婚姻規範に抗するセックスという「武器」の価値に目覚めさせたのは、女性解放運動よりも先に消費資本主義の功績だった。快樂としての性を存分に楽しむことを、都会で働く独身女性の特権だと宣言した、ヘレン・ガーリー・ブラウン(Helen Gurley Brown)の『セックスと独身女性』(Sex and the Single Girl [1962年])の売れ行きは、結婚からも愛からも切り離された性行動の自由が、'60年代半ばまでには少なくとも若い独身女性の間に、性の商品化の「恩恵」として享受され始めていたことを示唆している。やがて『コスモポリタン』誌(Cosmopolitan [1886年～])の編集長の座を勝ち取るブラウンは、『プレイボーイ』誌(Playboy [1953年～])の創刊によって、すでに巨万の富を築きつつあったヒュー・ヘフナー(Hugh Hefner)さながらの編集方針を打ち出して、この雑誌を全米有数の販売部数を誇る女性誌へと育てあげることになる。両誌はともに、この時代にニューヨークを始めとする大都市を、刹那的な快樂を謳歌する未婚の男女がさんざめく、グラマラスな性の楽園へと発展させていった

のである(D'Emilio & Freedman 302-06)。

都市に花開いたこの享乐的な独身者の文化は、性の快樂を婚姻のくびきから解放したという点で確かに革新的ではあったのだが、他方で基本的に物質主義的で異性愛中心主義的だという限界を抱えてもいた。独身者の楽園が持つこのような性格は、『ルビーフルーツ・ジャングル』のなかでも痛烈に批判されている。モリーが勤務先の出版社で遭遇した新たな敵、受付嬢のトップであるリーに、質の悪いはずらで一泡吹かせるくだりである。働きにというよりも、アヴァンチュールの機会を求めて会社に来ているようなこの女性は、毎日色の違うマニキュアを塗り、化粧ポーチには経口避妊薬を携えているセクシーな独身女性の典型なのだが、自分が熱を上げている男性編集者のアシスタントとして抜擢されたモリーを、的外れにも一方的に恋のライヴァルと見なして妬んだ罰を受けさせられるのである(RFJ 182-88)。また、ニューヨークでの最初の恋人であるホリーとの関係は(153-77)、女一般に対するモリーの侮蔑意識の証左だと指摘されているが(Fishbein 157)、これもむしろ、ホリーのような中産階級出身の独身女性に無為への惑溺を許す基盤としての物質主義に対して、労働者階級出身の独身女性としてのモリーが覚えざるをえない違和感の現れだと解釈の方が公平だろう¹⁵。たとえ同性愛者であっても、消費の快樂のなかで性の自由を追求するホリーと、消費資本主義を拒絶することによって、束縛を解き放たれた性の快樂を求めようとするモリーとは、'60年代の「性革命」を相反する方向から担った二つの若者の勢力である、都会の独身生活者とヒッピーとの、遠くて近い関係を奇妙になぞるような対照を示しているのである。

注意しておかなければならないのは、「性革命」は同性愛者には必ずしも「恩恵」をもたらしはしなかったことである。もちろん大都市には、'50年代からゲイのサブカルチャーが育ってきてはいたが、'60年代の末に炸裂した「ゲイ・パワー」によって、同性愛者のための解放運動の火蓋が切られるまでには¹⁶、公民権運動に始まり女性解放運動へと至る他のすべての反体制運動の経験を通して、同性愛者が自己を積極的に主張できるだけの力をつけておく必要があったのである。実際、レズビアンの多くは女性解放運動のただなかでさえ、自らの性的指向を公言することができなかった¹⁷。『ルビーフルーツ・ジャングル』にも、ルーム・メイトと性的関係にあることを暴かれたモリーが、恋人と引き離されてフロリダ州立大学を追われる場面があるが(RFJ 124-31)、同性愛は'74年までアメリカ精神医学協会(APA)が治療対象に

数える精神障害の一つだったし、その翌年まで同性愛者は、合衆国国家公務員任用委員会 (CSC) によって公職に就くことも禁じられていた (D' Emilio & Freedman 316-25)。なるほどモリーは「スーパー・レズビアン」(Horn D6) の名に恥じず、「個人的にも性的にもつねに開けっ広げ」(Fishbein 156 強調は筆者による) に生きているように見えはする。だがこのような評価が実際に妥当であるのなら、異性間のセックスがレズビアンのセックスに比べていかに劣っているかを、ローラー・スケートとフェラーリの違いにたとえてまで強調する彼女に (RFJ 203)、ほとんどつねに男性のセックス・パートナーがいるらしいのはなぜなのだろう¹⁸。

性的指向におけるモリーの「偽装」が最も鮮明に描かれるのは、もちろん、フロリダ州フォート・ローダーデイルでの高校時代のエピソードである。モリーの性的関心は当初から、チア・リーディング部を率いるキャロリンの、しなやかな体つきに向けられているのだが、彼女がこの友人と同じ女子学生クラブへの入会を選んだのは、このクラブと対を成している男子学生クラブの部長が、すでに自分のボーイ・フレンドだったからでもあった (RFJ 73-74)。もっとも、フットボールの花形選手との交際が、モリーにとってだけでなく、彼女の親友である「がちがちの異性愛者」コニーも含めたこの「校内最強のトリオ」全員の目に、高校生活の社交面に不可欠な世渡りの手段にすぎないものと映っているのは興味深いことである (98-99)。実際、'60年代の高校生にとって、学校は勉学の場である以上に社交的な競争の場だったから、高校生活に野心を抱く学生はみな、優秀な成績を得るためだけでなく、校内での人気をめぐってもしのぎを削っていた (Lasch 240-42)。やがて学生自治委員長になる抜群の優等生でありながら、モリーがセックスや飲酒、教師に仕掛ける巧妙ないたずらといった、派手な「掟破り」の常習犯としても注目を集めるのは、スターになることこそが成功への最も確実な近道なのだという、高校生活のもう一つの掟に彼女が十分自覚的だったからに他ならない。

特に若い女性の価値が、処女性によってではなく人気の有無で決まる事態は、高校が十代の自由な生活空間として機能し始めた '20年代に始まる文化現象だと評されている (D' Emilio & Freedman 239-42)。モリーはまさに、この「グッド・バッド・ガール」以来の「小悪魔」の仮面を積極的に被ることで¹⁹、レズビアンとしてのアイデンティティを隠したまま、異性愛中心主義が文字通り支配する高校生活を生き延びようと格闘したのである。卒業間際までは見事な効果を挙げた彼女のカムフラージュ

は、他方でこの「放埒と無責任」の時代の青春を席卷した快楽主義が、実はいかに苛烈な競争原理にのっとった文化だったのかを、裏面から物語る格好の表象ともなっている。見掛けによらぬ「堅物」のキャロリンが、自分のボーイ・フレンドとついに一線を越える決意をするのは、土曜の夜ごとの彼の猛攻に根負けしたからでもあるが、それよりも大きな理由はモリーとコニーに焚きつけられたからである。近い将来に、プロム・クイーンの花形が、自分を「ねんね」扱いする二人の親友に対抗意識を刺激されないわけがなかった (RFJ 98-100)。愛でも結婚でも、まして生殖でもなく、競争心に動機づけられたセックスの追求はその実、'60年代末には学校でも職場でもはっきりと顕在化していた、同輩間の人間関係における主導権をめぐる激しい競合状態と表裏を成す現象でもあったのである。

「愛に縛られるくらいなら、私は独りでかまわない」 (RFJ 88)、という信条を抱くモリーの深い孤独は、考えてみると、職業生活におけると私生活におけるとを問わず、個人の社会的な成功の可否が、その個人の持つ技術や能力以上に、人好きのする性格や社交性に左右されるようになった高度産業化時代の自由競争社会を生きる若者に、多少なりとも共有されていた心的傾向だった (Lasch 122-27)。キャロリンの場合もモリーの場合も、モリーと彼女の恋人たちとの関係が破綻するのはいつも、何かちょっとしたきっかけで、彼女たちが激情に駆られて思わず本音を曝け出してしまう瞬間なのだが、このことは「性革命」時代の自由奔放な若者が、いかに用心深く他人との全人格的な交わりを避けていたかをよく表している。モリーに劣らず「偽善嫌いな」コニーの醒めた「皮肉な」態度もまた (RFJ 80-81)、「罨にはまらないように」周囲のあらゆるものごとへの関わりから自己の内面を引き離すという、この世代がその一見にぎやかな享楽生活のなかで編み出した典型的な生き残りの知恵だった。まさに先を争うように快楽を追い求める一方で、親密な人間関係さえ一種のゲームと割り切り、齟齬があっても真剣に取り合わないでおくことは、挫折や失望、喪失感といった、社会生活のなかで経験されるさまざまなストレスから、自我が傷つかないように巧妙に張り巡らされた彼ら「ナルシスト」の無意識の防衛機制だったのである (Lasch 90-96, 171-74)。

結論

『ルビーフルーツ・ジャングル』のコミカルな筆致と痛快なプロット展開のおかげで²⁰、無敵のスーパー・ヒ

ロインとしてのモリー像は極めて鮮明に印象づけられているのだが、それでも注意深い読者の目になら、その威勢のよさの裏に隠れたモリーのナイーブな傷つきやすさが透けて見えるに違いない。たとえば、彼女の初恋の女性だったレオタとの12年ぶりの再会は、ニューヨークでの華やかな恋に疲れきったモリーが、この生涯最初の恋人に一方的なノスタルジーを抱いていたのでなかったら、それほど無残な経験にはならずすんだかもしれない(RFJ 216-21)。また彼女自身、享乐的なホリーとの絶縁ののちに知り合った年上の恋人、美術史の助教授であるポーリーナとの性関係を、自分が幻滅しているにもかかわらずなかなか清算できなかつた理由を、「愛よりもさびしさから」(208)だと認めている場面もある。それに何より、かつて中学校時代の彼女が、「自分を笑わせる者を好きにならない者はいない」だろうから、「校内一面白おかしい人物になろうと決意」(62)していたことを見落としてはなるまい。このいじましいまでの努力の陰で、他人に弱みを見せまいと歯を食いしばる彼女が、内心でひりつくような痛みを耐えていたであろうことは明らかである。モリーの勇ましさはひるがえって、貧困家庭に育つ野心的な少女として、また婚外子かつ養子として、その上レズビアンとしても、彼女が日々曝される差別から受ける傷の深さをおおうための、虚勢にも似た態度だったのではないかと考えられるのである。

一度モリーの強さやたくましきから、傷つきやすさに目を転じてみるなら、私たちには複数の選択肢に開かれた本作の結末部にこめられた意味が、あらためてよく理解されてくるはずである。苦学の末にニューヨーク大学を首席で卒業したモリーは、それにもかかわらず、フィルム・ディレクターとしてはどこにも就職できないという「ガラスの天井」に突き当たる。学生運動や女性解放運動のデモのニュースを遠いものに感じながら、女として、またそれ以上に、レズビアンとして生きることの絶望を噛みしめる彼女に、明日のレズビアン・フェミニスト活動家の姿を重ねることは、それほど難しくはなさそうである。なるほど彼女は、あまりに女に敵対的だったかもしれない。だがすでに見た通り、母親への嫌悪はレズビアンに限らず、女性解放運動勃興期の女たちに広く見られた傾向だった。また、同性愛者は「性革命」の恩恵に、必ずしも最初から与れたわけではなかつたので、モリーのような若いレズビアンが、自分と同世代の異性愛の女に接して苦々しさを覚え、むしろ従弟のリロイやゲイのカルヴィン、なかでもとりわけ「人生の敗残者」(RFJ 92)である養父カールのような「男らしくない男」の方に共感を抱いたとしても、容易に責められるべきで

はないだろう。ときあたかも、ストーンウォール暴動の起こった'69年に幕を閉じるモリーの波乱万丈の冒険譚は、あるレズビアン・フェミニスト誕生の、前日談として読まれるのでなければ十分には評価されえないのではないだろうか。彼女の孤独な闘いに、レズビアン・フェミニストの闘士としての完成されたスタイルを要求するのは、後年の読者の歴史的な後発性に基づく知的優位性の濫用であるように思われる。モリーが真に政治的に目覚めるのは、彼女が重ねてきたあらゆる自助努力が水泡に帰した、本作のこの苦いラスト・シーンのすぐ後のことになるはずだからである。

注

- 1 リタ・メイ・ブラウン(1944年～)は、レズビアン・フェミニズムの所信表明文である「女に一体化する女」("The Woman-identified Woman" [1970年])を書き、カミング・アウトしたレズビアンによる全米初のフェミニスト団体、ラディカルレズビアンズを組織した活動家の一人で、分離主義的なレズビアン・フェミニストのコレクティブ、フューリーズ(71年～74年、一説には72年までワシントンD.C.で活動)の創始者として知られている。同名の機関誌の発行を通じて展開した旺盛な執筆活動によって、フェミニストに政治的要請としてのレズビアンズムの重要性を訴え、レズビアンにフェミニストとしての政治的結束を呼びかけたフューリーズの活動は、その後の女性解放運動の発展に重要な影響を与えることになった。もっとも、意図してレズビアンになったフェミニスト、すなわち政治的レズビアンが存在は、実際には彼女たち相互の関係にも、彼女たちの対外的な関係にも少なからぬ葛藤をもたらした。フューリーズと分離主義の功罪についてはZimmerman 127-28を参照。
- 2 作家ジューン・アーノルド(June Arnold)と、そのパートナーで弁護士のパーク・ボーマン(Parke Bawman)が私財を投じて設立し、ナイアド・プレスやダイアナ・プレスといった、70年代におけるフェミニストの起業の模範例となった、独立系の出版社であるドーターズを指している。
- 3 レズリー・フィッシュバインは、モリーをハックルベリーにたとえるマリリン・ウェブに対し、『ハックルベリー・フィンの冒険』を「教養小説」と見なした上で反論しているが、ハックとモリーの類似性を支持しつつ、それをピカレスク・ヒロインとしてのモリーの役割の反映と見なしているのが、ルイズ・カワダである。
- 4 アメリカにおける「ネオ・ピカレスク小説」の代表作としては、以下の作品群があげられる。ラルフ・エリソン(Ralph Ellison)の『見えない人間』(*Invisible Man* [1952年])、ソール・ベロー(Saul Bellow)の『オーギー・マーチの冒険』(*The Adventures of Augie March* [1953年])、ジャック・ケルアック(Jack Kerouac)の『路上にて』(*On*

- the Road* [1957年])、ジョン・バース (John Barth) の『酔いどれ草の仲買人』(*The Sot-Weed Factor* [1960年])。そしてこれらの先駆けとして現れたのが、J・D・サルインジャー (Jerome David Salinger) の『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye* [1951年])である。
- 5 『ルビーフルーツ・ジャングル』は、このような独立系の出版社が世に出したレズビアン小説としては異例なことに、ほどなく大手商業出版社のバンタムにその版権を買い取られているのだが、その時点までの販売部数がすでに70,000部(一説には80,000部)を超えていたという驚くべき事実は、この作品がいかに一般読者の関心をも広く引きつけていたかを物語る証左だと言えるだろう。詳細はChew, Ward, Zimmerman 130、特にその注の19を参照。
 - 6 シャロン・D・ボイルによれば、ブラウンの小説を論じた学術論文は、'93年までの時点で6本書かれている。これに、ボイルの評伝と同年に発表されたルイズ・カワダの論考を加えても、その数は7本にしかならない。
 - 7 ここでのフィッシュバインの念頭に、アドリエンヌ・リッチ (Adrienne Rich) が「強制的異性愛とレズビアン存在」(*"Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence"* [1980年])で打ち出した、「レズビアン連続体」の概念があることは明らかである。
 - 8 ボニー・ジーマーマンは、レズビアン・ヒーローに作家やヴィジュアル・アーティストが多い理由を、レズビアンとしての自己形成を目指して繰り返されるレズビアン小説が、もともと一種の「探求物語」の形式をとりやすい必然性を持っていることに求めている (Zimmerman 73-75)。
 - 9 『スポック博士の育児書』は、アメリカの小児科医ベンジャミン・M・スポック (Benjamin Mclane Spock) が、授乳も排泄も幼児のしたいようにさせる、寛容な育児法を世界中に普及させた記録的なベストセラーで、近年まで全米の母親のバイブルとなってきた育児書である。
 - 10 UNESCOの統計によれば、'64年におけるアメリカの大学在籍者数は、'50年におけるその2.2倍に達していた。ローザックは、'60年代における「若者」の範疇を25歳以下と定義しながら、彼らが当時の全米総人口の、実に50パーセント超を占めていたことを指摘している (Roszak 28-31)。
 - 11 たとえば、シック・ヤング (Chic Young) の人気漫画『ブロンドイー』(*Blondie* [1933年~]) の登場人物であるダグウッド・バムステッドなどは、'50年代の大衆文化にあふれていた「冴えない父親」像の典型である (Roszak 31, Echols 16)。他にLasch 140も参照。
 - 12 母性に対するフェミニストの攻撃の急先鋒としては、妊娠と出産という「生物学の呪い」から女を解放するのは生殖医療技術の発達である、と論じた『性の弁証法』(*The Dialectics of Sex* [1970年]) のシュラミス・ファイアストーン (Shulamith Firestone) が最も有名である。また、アン・M・ヴォークの聞き取り調査によれば、わずか2~3年間という短命な活動に終わったことでも知られるフェューリーズでは、その凋落期に、メンバーの幼い子どもたち三人の共同生活からの追放という、痛ましい事件が起きていたという (Valk 324)。フェューリーズが共同保育に挫折していたという事実は、母性といかに向き合うのかが、彼女たちにとっても極めて大きな難問であっただろうことをうかがわせる。
 - 13 「陰オーガズムの神話」は、アン・コート (Anne Koedt) の同名の論文によってラディカル・フェミニズムの推進力となった、異性愛という性抑圧の制度に対するクリトリス・オーガズムの転覆力の謂いである。女性のオーガズムの源が、陰ではなくクリトリスにあることを証明し、『人間の性的反応』(*Human Sexual Response* [1966年]) の出版によって、'60年代半ばまで生き永らえていたフロイト理論の残滓を完全に払拭した、ウィリアム・マスターズとヴァージニア・ジョンソン (William H. Masters & Virginia E. Johnson) の性科学上の発見は、コートによってフェミニスト的に再分節化されたのである (D'Emilio & Freedman 312-13, Lasch 329-30)。
 - 14 夫婦間での避妊具の使用に対するあらゆる制限を違憲とする、'65年の連邦最高裁判所の判決は、ベッサリーやコンドームがすでに相当に普及していた実状を、司法が遅ればせながら追認した結果である。'73年の有名なロー対ウェイド裁判での最高裁判決まで、妊娠中絶の方は相変わらず違法行為であり続けていたものの、保健教育福祉省食品医薬品局 (FDA) が'60年に認可した、従来の方法にも増して画期的な、経口避妊薬 (ピル) という新しい避妊法の登場によって、'60年代は、産児制限の歴史における分水嶺を成す「避妊革命」の時代とも呼ばれている (D'Emilio & Freedman 242-55)。
 - 15 労働者階級出身の社会主義活動家として、ブラウンが抱かざるをえなかった資本主義へのアンビヴァレンスについては、Chew 66-67を参照。
 - 16 ゲイ解放運動は、ニューヨークはマンハッタンのグリニッジ・ヴィレッジにあったゲイ・バー、ストーンウォール・インで'69年の6月27日に起きた、警察の一斉検挙に抗する同性愛者の暴動が、その鮮烈な幕開けとなったことで知られている。
 - 17 『ルビーフルーツ・ジャングル』執筆前のブラウン自身が'70年、女性解放運動のただなかでカミング・アウトしたことが原因で、ベティー・フリーダ (Betty Friedan) 率いる全米女性機構 (NOW) からの離脱に追い込まれたいきさつは、女性解放運動史においてあまりにも有名である。またセアラ・M・エヴァンスも、新左翼運動内部における女性の抑圧を問題化し、女性解放運動誕生の直接のきっかけを作った女たちの間には、匿名のレズビアンへの貢献が埋もれているだろうと脚注のなかで述べている (Evans 124)。なおフリーダは、2005年2月4日に85歳の生涯を閉じた。
 - 18 モリーの「バイセクシュアリティ」には、キャロル・M・ウォードも言及している (Ward 47-57)。

- 19 「グッド・バッド・ガール」は、映画や小説のなかで、男を破滅させる悪魔的な「ヴァンプ(妖婦)」に代わって、次第に主流を成すようになった性的に魅力的な女の表象だが、ここには二者間の排他的で運命的な情熱から、遊戯性こそが最優先の開放的な快樂へという、20世紀中盤を通しての男女間の性的関係の質的变化が反映されていると言われている(Lasch 326-30, 341-47)。
- 20 ルイズ・カワダは、喜劇という表現形式を女の文学に領有することで、作劇法上もジェンダーの二元論を攪乱することに成功している点を、『ルビーフルーツ・ジャングル』の重要な功績として評価している。

文献

- Boyle, Sharon D. "Rita Mae Brown." *Contemporary Lesbian Writers of the United States: A Bio-bibliographical Critical Sourcebook*. Eds., Sandra Pollack and Denise D. Knight. Westport: Greenwood Press, 1993.
- Brown, Rita Mae. *Ruby-fruit Jungle*. 1973. London: Bantam Books, 1977 『女になりたい』中田えりか訳(二見書房、1980年。ただし、本稿本文中の引用は拙訳による)
- Chew, Martha. "Rita Mae Brown: Feminist Theorist and Southern Novelist." *Southern Quarterly* 22 (1983): 61-80.
- D' Emilio, John and Estelle B. Freedman. *Intimate Matters: A History of Sexuality in America*. 1988. Chicago: The University of Chicago Press, 1997.
- Dickstein, Morris. "The Fifties were Radical too: How the Counter-culture had Its Roots in the Eisenhower Age." *Times Literary Supplement* (June 8, 2001): 13-15.
- Echols, Alice. "We Gotta Get out of This Place: Notes toward a Remapping of the Sixties." *Socialist Review* 22 (April-June 1992): 9-33.
- Evans, Sara M. *Personal Politics: The Roots of Women's Liberation in the Civil Rights Movement and the New Left*. New York: Vintage Books, 1980.
- Fishbein, Leslie. "Rubyfruit Jungle: Lesbianism, Feminism, and Narcissism." *International Journal of Women's Studies* 7, no. 2 (March-April 1984): 155-59.
- Horn, Carol. "Out of the Closet and the Plain Brown Wrapper." *Washington Post* (February 14, 1974): D6.
- Kawada, Louise. "Liberating Laughter: Comedic Form in Some Lesbian Novels." *Sexual Practice / Textual Theory: Lesbian Cultural Criticism*. Eds., Susan J. Wolfe and Julia Penelope. Cambridge: Blackwell, 1993.
- Lasch, Christopher. *Culture of Narcissism: American Life in an Age of Diminishing Expectations*. New York: Warner Books, 1979.
- Rozsak, Theodore. *The Making of a Counter Culture: Reflections on the Technocratic Society and Its Youthful Opposition*. 1969. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1995.
- Valk, Anne M. "Living a Feminist Lifestyle: The Intersection of Theory and Action in a Lesbian Feminist Collective." *Feminist Studies* 28, no. 2 (Summer 2002): 303-32.
- Ward, Carol M. *Rita Mae Brown*. New York: Twayne Publishers, 1993.
- Webb, Marilyn. "Daughters, Inc.: A Publishing House is Born." *Ms.* 2 (June 1974): 35-38.
- Zimmerman, Bonnie. *The Safe Sea of Women: Lesbian Fiction 1969-1989*. Boston: Beacon Press, 1990.